

# 対話型パブリックコメントにおける生（なま）の表現と その受け手の問題

Problems on Untamed Expressions and Their Address in Interactive Public Comment

高梨克也<sup>1</sup> 秋谷直矩<sup>2</sup> 城綾実<sup>1</sup> 水町衣里<sup>1</sup> 加納圭<sup>3,1</sup>

Katsuya Takanahi<sup>1</sup>, Naonori Akiya<sup>2</sup>, Ayami Joh<sup>1</sup>, Eri Mizumachi<sup>1</sup> and Kei Kano<sup>3,1</sup>

<sup>1</sup>京都大学 <sup>2</sup>山口大学 <sup>3</sup>滋賀大学

<sup>1</sup>Kyoto University <sup>2</sup>Yamaguchi University <sup>3</sup>Shiga University

**Abstract:** "Interactive public comment" is a method for public involvement which authors have developed, the aim of which is to collect citizens' opinions, and summarize and deliver them to administrators. Opinions collected at such workshops, however, very often contain a lot of "untamed" expressions, contrastive to professional terms familiar to most of administrators, and then requiring sensitive handling by operators. Through analyzing examples of those expressions observed in fieldwork, this article exhibits a possibility that these untamed expressions are not addressed to the facilitator of the workshop but rather to other co-participants who sometimes have co-membership with the speaker and are adopted in order to elicit empathy with and affirmation about the opinions from them, and argues that it therefore is necessary to devise some ways to appropriately utilize advantages of such untamed expressions.

## 1. はじめに

著者らが行ってきた一般市民参加型ワークショップ「対話型パブリックコメント」では、収集された意見を集約し、行政担当者による政策立案などにつなげていくことが特徴である。しかし、ワークショップにおける参加者の発言の中には、集約された意見を最終的に受け取ることになる行政担当者にとってなじみのある専門用語などとは対照的な、いわゆる「生（なま）の表現」も多く含まれており、取扱いが難しい。そこで、本稿では、事例分析を通じて、なまの表現が対話を進行・記録する主催者ではなく、発言者と同じ立場の一般参加者を受け手として、彼らからの共感や承認を引き出すために選択された表現である可能性があること、そのため、主催者による記録・集約の際には、こうした表現をどのように生かすかに関する工夫が必要となることを論じる。

## 2. 対話型パブリックコメント

著者らは、科学技術振興機構社会技術研究開発センターRISTEXの「戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）：科学技術イノベーション政策のための

科学研究開発プログラム」の一つとして、「STI（科学技術イノベーション）に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計 PESTI」を進めてきた。PESTIでは、より多くの層の市民の声を政策に届けることを支援する目的で、「対話型パブリックコメント」（以下「対話型パブコメ」）という手法を確立し、ワークショップなどの場でのグループディスカッションを通じて表明された意見を集約した結果を各府省庁・自治体等に届けてきた。

マクロレベル（図1上段）では、対話型パブコメは市民から行政への「集約型」の実践である。市民参画 public involvement については、行政から市民への一方向的な「情報提供」からより双方向的な「権限付与」へという参画のレベルの比較があるが[1][2]、対話型パブコメは意見を収集する場は双方向的であるものの、収集された意見は行政サイドへと一方向的に提供される側面が大きい点に特徴がある。

対話の場での意見の生成からプロジェクトによる集約、実務家への情報提供という対話型パブコメのメゾレベル（中段）のプロセスについては、元になった意見記録や対話の場での発言に遡って検証することによって、意見記録や集約に伴う脱文脈化と情報圧縮という課題を明らかにしてきた[3]。しかし、

\* 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院情報学研究科  
E-mail: takanasi@sap.ist.i.kyoto-u.ac.jp

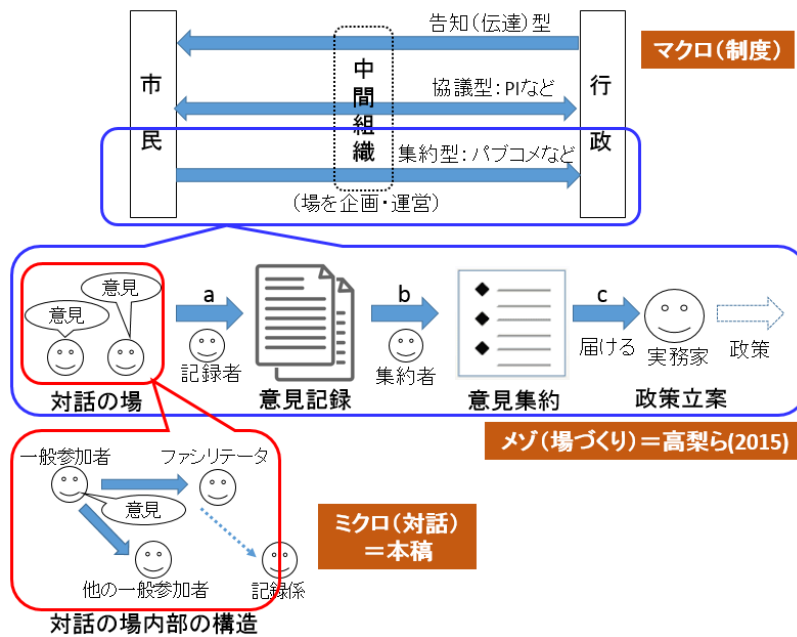


図1 対話型パブリックコメントのプロセスと位置づけ

そこでは対話の場の内部での参加者たちの微視的な振る舞いというマイクロレベル（下段）での特徴については十分に分析できなかった。そこで、本稿では、発言の中での表現の質やこれに対する他の参加者の受け取りを焦点とした分析を行う。

### 3. 募集型でのファシリテーション

第4節では、参加者の意見に含まれる「なまの表現」の分析を行うが、これとの比較のため、本節では、PESTIによる一連の対話型パブコメ「夢ビジョン2020」の中の一回として2014年7月実施に開催されたフォーカスグループインタビュー(FGI)を対象として、参加者の意見に対するファシリテータの応答の特徴を予め分析しておく。

#### 3.1 ファシリテータの聞き手行動

FGIには次のような利点がある[4]。共通しているのは複数の参加者間での横の関係の重要性である。

1. 相乗効果：グループでの相互作用を通じて、より広範なまとまったデータが得られる
2. 雪だるま性：ある参加者の発言がさらなる発言を連鎖反動的に引き起こす
3. 刺激性：グループでの議論そのものが話題についての刺激を産み出す
4. 安心：グループが安らぎをもたらす、率直な発言を促進する

5. 自発性：参加者はすべての質問に答える必要はないので、自発的で純粋な回答が得られる

しかし、これはあくまで理想であり、現実にはファシリテータとそれぞれの参加者との間の質問応答の連続に終始することも多い。特に、日常会話とは異なり、FGIなどの実践には、参加者自身が設定した場ではなく、参加者は企画運営者が何らかの目的を持って設定した場に募集されて参加しているという構造的特徴があるため[5]、参加者同士は初対面であることが多い。従って、ファシリテータが参加者間の横の関係を意識的に促進しなければ、参加者の発言は他の参加者ではなく、場における「ドミナントな受け手」としてのファシリテータに向けられたものなりやすい<sup>1</sup>。連鎖構造の観点からは、ファシリテータの質問→参加者の回答→第3位置[7]でのファシリテータの応答、というパターンが典型的となる。

そこで、第3位置でのファシリテータ（事例中ではf）の応答の形式を分析したところ、今回のデータでは、聞き手行動の分類[8]のうちの、狭義のあいづち（応答系／感情表出系感動詞）以外の語彙的応答、繰り返し、共同補完も多く見られた。

(1)

E：あとは、ちょっとどうなっているか、  
犯罪が多い国になってしまう。

f：はあはあ。犯罪が多い。なるほど。

【繰り返し】【語彙的応答】

<sup>1</sup> この性質は一つのテーブルに一人の科学者（専門家）と複数の一般参加者が含まれるサイエンスカフェなどの

科学技術コミュニケーションの場にも共通していると考えられる[6]。

(2)

- f : 何か特にこう、これはこういう理由でこうなんだ  
っていうのが、もしあれば、ちょっと、コメント。  
E : 環境政策、2にしたのは、  
f : 環境が大事だと。【共同補完】  
E : はい。地球環境自体が悪くなってしまったら、  
もう地球自体がなくなってしまうので、  
そこに一番注いだ。

また、ファシリテータが参加者による表現をそのまま繰り返すのではなく別の表現で言い換えたり(下線)、その発言の要点を端的な表現で定式化<sup>2</sup>したりしていることも多く、その際、平叙文でなく確認のための質問の形式をとることも見られた。

(3)

- E : お金の使い道でいうと、最近あった、その、  
いろいろと不正に利用していたみたいなことも、  
たぶん見せないと思うので。 ((中略))  
その辺をもうちょっと、分かりやすく、  
f : どう使われているかということの、まあ、えっと、  
説明責任って言うんですかね。【言い換え】  
E : はい。  
f : そういうアカウントビリティーというか【言い換え】  
それがないところが問題で、それをあの、どうい  
う使われたかについていうことをちゃんと示して  
ほしいと、そういうことが非常に重要じゃないか  
ということですね。【確認要求】

(4)

- B : ね、やっぱり、点滴だけで生きていっちゃる方  
とかは、幸せなんやろうかっていうのもあるし。  
で、自分からまあね、何十年、生きてきて、  
最期というのは、あの、どうなるのかなというのと、  
((中略))  
f : だから、一つはあれですよね、人生の最後の終わり  
方というか、充実した終わり方にするには、  
どうしたらいいか。【定式化】  
B : どうしたらいいか。  
f : 単にその延命治療ではなくて。【言い換え】  
B : じゃなく。うんうん。

言い換えや確認のための質問の重要性は FGI やメディアエーションなどでも広く認識されており[11]、カウンセラーによる傾聴でも推奨される[12]。狭義のあいづちとは異なり、これらの聞き手応答は発言を適切に理解していなければ行うことができないものであるため、ファシリテータが発言を理解したことを「立証」[13]するものとなりうると考えられる。加えて、特に複数の参加者がいる FGI においては、ファシリテータによる言い換えや定式化は当該の発言者に向けられているだけでなく、発言の趣旨を他の参加者にも明示化し、共有する役割ももつ。この観点からいえば、ここでのファシリテータの聴取行動は標準的なものだとも言えそうである。

<sup>2</sup> 「定式化 formulation」には要約や要点の提示、表現の仕方の選択、場所と人物の指示といったやや異なる用法が含まれるが[9][10]、ここでの定式化は「要約や要点の提

### 3.2 言い換える権限

しかし、上記の言い換えや定式化の事例をより詳細に分析するならば、これらがファシリテーションなどで一般的に推奨されているのとは異なる側面も持っている可能性が見えてくる。

まず、事例(3)では、参加者による予算が(参加者の表現を用いるならば)「不正」でなく用いられていたかを「見せない」といけないという意見に対して、ファシリテータはこれを「説明責任」「アカウントビリティー」と言い換えている。この言い換えは一見すると発言の要点を端的に捉えているようにも感じられるが、そのように感じられるのは、読者がこの「説明責任」「アカウントビリティー」といったより専門的な用語の意味を理解しているからであろう。逆に言えば、これらの言い換え表現は元の「発言者自身のもの」であるといえるだろうか。同様の疑問は事例(4)のファシリテータによる「人生の最後の終わり方、充実した終わり方」といった定式化や「延命治療」という言い換えについてもいえる。

おそらくここには、ファシリテータによる聴取行動が単に発言者や他の参加者に資するためのものであるだけでなく、発言の真意を確認・明確化することによって意見の記録や集約を容易にするという、主催者側にとっての動機が関係していると考えられる。つまり、この場での参加者の発言は、ファシリテータや他の参加者が単に「個人」として、その場限りの会話において理解するためのものではなく、主催者によって「募集」された参加者から主催者が「収集」し、集約を経て、行政担当者に届けられるためのものなのである(第2節, [3])。

発言の中の表現に「著作権」[14]があると考えれば、発言者が用いた表現をファシリテータが言い換えたり、記録係が言い換えられた後の表現の方を記録したりすることの「権限」が十分に意識される必要がある。しかし、その一方で、市民の意見を行政に届けるための仕組みを作るといった目的自体はおそらく健全な試みであるため、「なまの表現」を言い換えたり定式化することにより、「脱文脈化」[3]された意見を受け取らざるをえない行政担当者にとっての理解可能性を確保しようとする主催者側の動機も十分に首肯できる。このように、対話の場で生み出された意見や表現を対話外の場に届けるという試みには本質的なジレンマが付き纏う。

示」に相当する。ただし、第4節で焦点とする「なまの表現」も、ここでの「表現の仕方の選択」に関わるものである可能性もある(4.3節)。

## 4. 出向く場での生（なま）の意見

本節で分析対象とするのも PESTI による対話型パブコメ「夢ビジョン 2020」の中の 1 回である。しかし、前節で分析した FGI は企画者が参加者を一般募集して行われたものであるのに対して<sup>3</sup>、本節で分析するのは、テーマと進行方法、開催時期は同じであるものの、調査者が参加者の既存のコミュニティと生活環境に出向いていくフィールド調査型のものである。募集型の FGI では参加者同士が互いに初対面であったのに対して、「出向く」アプローチの場合、参加者同士が事前に十分な面識を持っているという「横の関係」（3.1 節）によって、発言がより容易になると考えられる。そこで、以下では、こうした参加者間の既存の人間関係という観点から、参加者の「なまの発言」の特徴を分析していく。事例の分析では、図 2 の参加者配置を参照されたい。



図 2 参加者の空間配置 (f がファシリテータ)

### 4.1 参加者による「生（なま）の表現」

事例（5）では、原発事故の処理についての議論の中で、参加者 C が「対処」「問題解決」といった硬い表現ではなく、「後始末」という日常語彙、すなわち「なまの表現」を使用している。なまの表現の利点としては、発言者自身の生活感覚に合致しているということ以外にも、共に参加している他の一般参加者からの共感を引き出しやすいという相互行為上の効果があるのではないと思われる。実際、第 3 節の FGI の事例とは対照的に、事例（5）の議論の最中、発言者は視線をファシリテータではなく他の参加者に多く向けており（[→X]）、聞き手となっている他の参加者もまた、的確な位置でのうなずき

<sup>3</sup> PESTI では科学技術への関心度の異なるさまざまなセグメントの市民から意見を聴取するための手法の開発を目的していたが、特に低関心層にアプローチするのは容易でないため、参加者を一般募集する FGI を行った。同様の方法で行われた FGI においては、低関心層の参加者が「知識を持たない者」としての自己呈示を戦略的に用いていることなどが明らかになってきている[15]。

<sup>4</sup> もう一つの可能性として、なまの表現がファシリテータを受け手としている場合にも、参加者は自らを「市井

（<X:領き→Y>）を多く行うことによって、共感的態度を表明している。こうした参加者間での相互承認を通じて、また、この表現が以降の部分でも半ば「流行語」のようにして他の参加者によっても繰り返されていくことによって、場の「世論」のようなものが形成（あるいは再生産）されていく。実際、この表現が功を奏したということは、ファシリテータによるリアルタイムでの意見集約（PC で随時入力）の中に「後始末と科学技術イノベーションはセット」と記録されていることから分かる。

### 4.2 「生（なま）の表現」の受け手

なまの表現は他の参加者に直感的に「響きやすい」表現であることにより、むしろ厳密に用いられた専門用語よりも大きな力を発揮できる場合があると考えられる。Sacks ら[17]は、参加者の発話が、語彙（表現）や話題の選択などによって、特定の共参加者に対する指向と感応性を示すように構成されることを「受け手デザイン recipient design」と呼んでいるが、この観点からは、なまの表現の「選択」の受け手（宛先）はファシリテータではなく、他の参加者であるといえるかもしれない<sup>4</sup>。

その場合、ファシリテータや記録係はこうした事態をどの程度意識化し、この場で自らに課せられている役割に応じてどのように対処すべきなのであるか。現実には、第 3 節でのファシリテータによる言い換えや定式化の事例のように、こうしたなまの表現がその場において持っていたニュアンスは言い換えや定式化によって薄れてしまうことも多いと考えられる。

さらに、受け手デザインという観点からは、「表現の選択」（3.1 節）という意味では、なまの表現自体もまた、参加者自身による定式化実践であると見なすべきであるのかもしれない<sup>5</sup>。その場合、参加者自身による定式化とファシリテータによる定式化の間には潜在的な緊張関係も存在しうることになる。

### 4.3 参加者間の共成員性と「小さな世間」

FGI のように、主催者が一般参加者を「個人」単位で募集する場合には、参加者間の既存の人間関係をあてにすることはできないため、FGI の利点で

の人」としてカテゴリ化することによって、ファシリテータ（や場の主催者？）からの差別化を図っているということも考えられる。対話型パブコメのような市民参画の場において参加者が「何者として」発言するかという問題に関しては秋谷ら[16]の分析がある。

<sup>5</sup> その意味では、なまの表現のファシリテータによる言い換えはむしろ「再定式化 re-formulation」ないし「メタ定式化 meta-formulation」と呼ばれるべきかもしれない。

(5) <sup>6</sup>

((原発事故の処理が進んでいないという現状について議論している。Bは子どもを膝に抱えており、ほとんど発言もうなずきもなく、Fは一時退席している。ファシリテーターfは★の位置までは視線を下方のPCに向け、意見の入力を続けている))

- C : だから、もっとなんか、結局科学技術をもっても止められへんのかとか思う [→G], よね、こう、汚染漏れとか。  
 <G:傾き→C>  
 <E:傾き→C> <G:傾き→C>
- G : ねえ。(・・・).
- C : (・・・)とか。うん。[→f] 今だに [→G] あんなん、ねえ。[↓] だから、やっぱしそこかな。ははは。ちゃんと、うん。★  
 <E:傾き→C> <E:傾き→C> <G:傾き→C>
- ((これまでPCに視線を落としていたfが視線をCに向ける))
- C : だから、作るばっかしじゃなくて、私、科学とかを研究したり、勉強したりして、[→f] 新しい、  
 [↓] そ、それこそさっきのイノベーション起こすってあって、新しいことやんのはいいかも  
 しれんけど、じゃなくて、後始末もちゃんとしてよ [→f] 【図2】 っていう感じが [→G].  
 <D:傾き↓> <D:傾き↓>((以降小刻みな傾きをしばらく繰り返す))  
 <E:傾き↓>  
 <G:傾き→C>
- f : [→C] ああ、そう、[→E] 確かに。[新しいもんを。(再び視線をPCに落とし入力を再開)]  
 E : [→C] セットですよ。 <G:傾き↓>
- C : [→E] そう<傾き> [↓] だから、後始末もできて初めての [→G] 発表みたいな [→f].  
 <G:傾き→C>((複数回繰り返す))  
 <E:傾き→C>
- : [→G][↓] うーん。だから、今の、ほんまに原発も後始末できてないのに、また作ろうとか、次動かそうとかじゃなくて、  
 : まず後始末してくれたら、たぶんみんな [→G] オーケー出すってって[→f], いう感じが [→G] すごくするよね。  
 <G:傾き→C> <G:傾き→C> <G:傾き→C>  
 <E:傾き↓>  
 <D:傾き↓>
- G : (・・・) [→E]  
 <E:傾き→G>
- C : みんな反対してるのは、後始末ができてないから [→f] [やと思うねんね [→G]].  
 <G:傾き→C>
- f : [→C] 不思議ですよ。 <G:傾き→C>  
 C : うん<傾き→C>  
 E : なんか [→f] 不思議なんです。それをなんでまた [↓], で、ね、[→f] 収束してないのに、[→C] なんでまた新しくやるとか、  
 C : [うん  
 f : [うんうん  
 <D:傾き→E>  
 E : [→f] ねえ、今、せっかくストップしてるのに、<傾き→G> また、ね [→f], 始めようとしてるとか。  
 <G:傾き→E>  
 <D:傾き→E> <D:傾き↓>  
 <f:傾き↓>
- : こっちが [→C] 片付いて [→D] ないのに、[→f] なんでできるのか、やろうとするのか不思議で、[→C] [仕方がない。  
 <D:傾き→E> <D:傾き↓>
- f : [不思議ですよ。 <D:傾き↓>  
 C : [→E] だから、[↓] こっちが後始末をたぶん、その、なんていうのかな、お金が [→E] 掛かるだけで [→G],  
 <G:傾き→C>
- : 何も [→f] 生まないから、じゃないんですか。  
 f : <傾き→C> 鋭いです。(笑い)

ある「横の関係」(3.1 節)が実際には十分に活用されず、むしろ参与者同士が互いに相手の出方を探り合うことになる場合もある[15]。他方、「出向く」アプローチでは、参加者はいわば「グループ単位」でこの場に参加しており、事例(5)でも見たように、既存の人間関係に基づく横の関係が生まれやすい。この観点からは、なまの表現は、単に「他の参加者」に向けられているだけでなく、何らかの共成員性のようなものを前提とし、また、これを顕在化させるものなのではないとも考えられる。

しかし、他方で、参加者同士の間に、当該の対話の場以前から形成されてきた関係性の歴史がある場合には、人間関係の固定化や強力な参加者の意見への

同調といったデメリットも生じるかもしれない。

次の事例(6)では、Dが自分の地元での企業による地域活性化のエピソードを紹介しているが、なかなかうまく説明できず、言い淀みながら発言している(下線)。すると、Dが言い淀んだ時点で、Cが「そ、分かる」と言って、Dのエピソードから引き出される要点を既に行われていたリアモーターカーに関する批判的な議論と関連づけながら取りまとめ始める(→行以降)。この取りまとめめに対して、GやDも積極的に同調するが、その際、視線もCに向けていることが多い。このようにして、複数の参与者によるやり取りがCを中心として「オピニオン」にまとめられていく。

<sup>6</sup> [→X]: 発言者がXに視線を向ける, [↓]: 下方に視線を向ける, <X:傾き→Y>: XがYに視線を向けながらう

なずく(Xがない場合は発言者のうなずき)。うなずきのタイミングは直前の発言行内の位置に対応している。

(6)

D: だから, その町自体もなんだろう, その子育てとか, ええ, なんか詳しく, なんかちゃんと説明できないんですけど, すごくこう, いい感じに,  
: その地元の人たちを使って, その会社がすごくいいふうに回ってるのをこないだテレビで見て, こういうのもあるのかっていうか, そのう.

((中略))

: ほんとに何もないところだけど, うん, なんか, そういうので, 人をこう, 確保し, なんていうか,

→ C: そ, 分かる.

C: リアモーターカーとかさ,

D: うん.

C: 例えば次の日に遊ぶ, こう, 繁華街とかではなく,

D: うんうんうんうんうん

C: なんかそんなんじゃないかって, なんか.

G: それはね, 大阪とか, 神戸に...

C: そう. いててくれればいいねんっていう感じやねんね.

G: うん.

C: そういうところを, じゃないとこでアピールして, なんかこう,

D: うん. そういうのもなんかこう, 頑張ればあり なんじゃないかなっていうか, その, うん.

C: そうやね.

こうした事例からは, ミクロレベルでは参加者間での強い共感や相互理解が見て取れるものの, 他方で, 場づくりや意見集約といったメゾ・マクロレベルの観点からは, 各参加者が対話外での人間関係を全く考慮せずに, 「個人」として自由に意見を表明できているかという疑問も生じるかもしれない. 出向くアプローチにもやはりそれ相応のジレンマがある.

## 5. おわりに

本稿では, 募集型と「出向く」型という異なる方法で行われた同じテーマについての対話型パブリックコメントの比較を通じて, そこでの参加者の意見に含まれる「なまの表現」に纏わるジレンマの存在を明らかにしてきた. FGI に限らず, フィールド調査でも広く用いられる対面型のインタビューでは, 受け手がインタビュアーであるため「よそ行き」で「公式」の見解が述べられやすい. 対照的に, 「出向く」アプローチには, 当事者同士の間での「なま」の声が得られるという強みがある. ただし, そこには, 取り扱われるべきは「個人」としての参加者によって表明された意見なのか, それとも他の参加者によって「共感」された意見なのかといった問題も潜在している. こうしたなまの表現の持つであろう長所をどうやって活かしていくかという点は今後のファシリテーションや意見記録・集約の課題となる.

## 謝辞

有益な情報をご教示くださいました大塚裕子氏, 田頭篤氏, 平本毅氏に感謝いたします. 本研究は JST RISTEX 「STI に

向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」(研究開発プログラム「科学技術イノベーション政策のための科学」, 代表者: 加納圭) の支援を受けて行われた.

## 参考文献

- [1] 屋井鉄雄, 前川秀和 (監修): 市民参画の道づくりパブリック・インボルブメント (PI) ハンドブック, ぎょうせい, (2004)
- [2] 大塚裕子, 乾孝司, 奥村学: 意見分析エンジン—計算言語学と社会学の接点—, コロナ社, (2007)
- [3] 高梨克也, 城綾実, 秋谷直矩, 水町衣里, 加納圭: 「対話型パブリックコメント」による意見収集・集約の利点と課題の分析, 電子情報通信学会技術報告 HCS2015-53, 71-76, (2015)
- [4] S・ヴォーン, J・S・シューム, J・シナグブ: グループ・インタビューの技法, 井下理他 (訳), 慶応義塾大学出版会, (1999)
- [5] 高梨克也: インタラクション分析に基づく科学コミュニケーションのリ・デザイン, 市民参加の話し合い (仮題), 村田和代 (編), ひつじ書房, (近刊)
- [6] 高梨克也, 加納圭, 水町衣里, 元木環: 双方向コミュニケーションでは誰が誰に話すのか?—サイエンスカフェにおける科学者のコミュニケーションスキルのビデオ分析—, 科学技術コミュニケーション, 11, 3-17, (2012)
- [7] Schegloff, E. A.: Sequence Organization in Interaction: A s Primer in Conversation Analysis; 1, Cambridge University Press, (2007)
- [8] 伝康晴: 対話への情報付与, 講座日本語コーパス 3: 話し言葉コーパス—設計と構築—, 小磯花絵 (編), 朝倉書店, 101-130, (2015)
- [9] Deppermann, A.: The study of formulations as a key to an interactional semantics, Human studies, 34(2), 115-128, (2011)
- [10] 平本毅: 定式化実践, 子どもの豊かな学びの世界をみとる—これからの授業分析の可能性, 五十嵐素子他 (編), 新曜社, (近刊)
- [11] 大塚裕子, 丸元聡子, 岩佐賢治, 鈴木温, 矢嶋宏光, 奥村学, 屋井鉄雄: 市民参画型道路計画における対話実践—対話型アンケートシステムの実装に向けて—, 交通工学, 42 (2), 47-57, (2007)
- [12] 三島徳雄, 久保田進也: 積極傾聴を学ぶ—発見的体験学習法の実践, 中央労働災害防止協会, (2003)
- [13] Sacks, H.: Lectures on Conversation vol.1 & 2, Blackwell, (1992)
- [14] 串田秀也: ユニゾンにおける伝達と交感—会話における「著作権」の記述をめざして—, コミュニケーションの自然誌, 谷泰 (編), 新曜社, 249-294, (1997)
- [15] 秋谷直矩, 水町衣里, 高梨克也, 加納圭: 知識の状態を提示すること—再生医療にかんするグループインタビューにおける参与構造の分析, 科学技術コミュニケーション, 13, 17-30, (2013)
- [16] 秋谷直矩, 高梨克也, 水町衣里, 工藤充, 加納圭: 何者として, 何を話すか—対話型ワークショップにおける発話者アイデンティティの取り扱い—, 科学技術コミュニケーション, 15, 107-122, (2014)
- [17] Sacks, H., Schegloff, E., Jefferson, G.: A simplest systematics for organization of turn-taking for conversation. Language, 50(4), 696-735, (1974) (西阪仰 (訳), 会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述, 会話分析基本論集: 順番交替と修復の組織, 世界思想社, 5-153, (2010))